

## [課題演習概要]

聞き手指導に焦点を当てた英語科授業研究  
—「話すこと[やり取り]」の言語活動を通して—

丸 山 野 夏 子

Natsuko MARUYAMANO

福岡教育大学大学院教育学研究科教職実践専攻教育実践力開発コース

キーワード：コミュニケーション，「話すこと [やり取り]」，聞き手，話し手

## 1 研究の目的

平成 29 年度に文部科学省が告示した中学校学習指導要領では，コミュニケーション能力の育成を目指し，「即興性」・「やり取り」を意識した「話すこと [やり取り]」の言語活動が新たに設定された。

これまでの課題演習では，「話すこと [やり取り]」において，学習者が話し手として自分の言いたいことを英語で表現するための授業研究を行ってきた。

しかし，坂田(2006)は，聞き手も話し手の内容を受けて発話する役割があると述べている。また，英語での会話例から，聞き手として相づちや内容確認，質問等を使った聞き手としての発話の事例も挙げている。

上記の先行研究から，コミュニケーション内で，話し手だけでなく，聞き手も発話者であることが分かった。そこで，発話者としての聞き手に新たに焦点を当て，聞き手の発話の種類を坂田(2006)の会話の事例より分類した。大きく分けて2つの種類に分けることができた。①話し手の話を受けて，相づちや繰り返し，共感，感想等の反応を示すこと②話し手の話を受けて，疑問詞を用いた疑問文や Yes/No 疑問文，話を理解するために要求をする等の質問をすることである。よって，発話者としての聞き手は，比較的発話がパターン化できることが分かった。また，パターン化されていることより，発話の内容は，暗記できるものが多いのではないかと仮定した。このような発話者である聞き手の特徴や仮定をもとに，「話すこと [やり取り]」の中で，聞き手に焦点を当てて指導を進めることで，学習者が行うコミュニケーションがどのように変容するかを検証する。

## 2 研究の計画

学習者である中学生を対象に，聞き手としての難しさの理由をアンケートで尋ねる。学習者が感じる難しさを緩和した聞き手の指導を授業実践で行い，コミュニケーション活動がどのように変容するかを検証する。

## 3 研究の内容

## (1) 学習アンケート

福岡県内の A 中学校 1 年生 34 名を対象に，学習アンケートを実施した。

表 1 アンケート結果

①聞き手として反応したり質問する時に， 難しさを感じることはありますか？	
ある	19 名
ない	10 名
わからない	5 名

あると回答した生徒の具体的な理由として，聞き手としての反応や質問の種類，語句や文法の意味や発音が分からないと回答した生徒が6割を占めていた。すぐに反応や質問する難しさ，反応することへの恥ずかしさや苦手を回答している生徒も少数いた。また，ないと回答した生徒の中に，友達に質問する方が自分で意見を言うよりも楽と回答している生徒もいた。

また，話し手としての難しさの質問も行い，聞き手と関連させ，両者の回答の傾向を複数のパターンに分類した。聞き手，話し手両者ともに難しさを感じると回答した生徒は9名いた。また，話し手側では難しさを感じ，聞き側では難しさを感じない生徒は，2名いた。一方で，聞き手側では難しさを感じ，話し手側では難しさを感じないと

回答した生徒はいなかった。

## (2) 授業実践の内容

学習アンケートでの生徒の回答を基に、以下の内容で、授業実践を行った。

実践日	2021 年 12 月 1 日
対象生徒	福岡県内の A 中学校 1 年生 35 名
単元名	A surprise party (8/9 時間)
主眼	Who am I? クイズで現在進行形や今まで習った文法を使って、尋ねたり説明したりしよう！

Who am I? クイズを授業内で行った。クイズの概要は以下の通りである。

- ・イラストの中の人物を選び、演じる。
- ・2 人 1 組になり、会話をしながら、パートナーが誰を演じているか当てるクイズである。
- ・A パターン、B パターンとイラストがあり、両パターンから 1 人ずつ選ばせた。
- ・聞き手も発話者であるために、B パターンは聞き手が追質問を複数回しなければ、演じている人がわからないように設定した。

学習アンケートの回答を基に仕組んだ手立ては以下の 3 つである。

①学習プリントに、コミュニケーション内で使用する英文や、聞き手側として使用する反応や質問文を、表にして記載した。

②Who am I? クイズを行う前に、使用する英文や、反応表や質問表の中で、読み方や意味の確認をペアで行わせた。

③クイズ中に困った際は、サポーターとして隣の席にいる、普段英語の授業内で指定されているパートナーに尋ねても良いことにした。

## (3) 授業実践の結果

生徒たちがクイズをしている様子から結果をまとめる。以下、クイズを行っている様子である。

表 2 実際のクイズの様子①

聞き手 A	えっ、次何て言おう。
A のサポーター	服の色が違うから、(質問表を指さして) これは?
聞き手 A	What color T-shirt do you have?
話し手 B	I have red T-shirt.

表 3 実際のクイズの様子②

話し手 C	I have red T-shirt.
D のサポーター	(反応表を見せながら) この辺とか使えるよ。
聞き手 D	うーん。All right. Are you Jun? (サポーターの方を見て)
D のサポーター	(頷き、話し手 C の方に手を差し出す)
聞き手 D	All right. Are you Jun?
話し手 C	Yes, I am.

①、②の場面より、サポーターに尋ねている内容が、語彙や文法的な部分ではないことから、学習プリントや、クイズ前の確認の時間によって、聞き手として学習者が感じる、語彙的、文法的な難しさを解消することができたと考えられる。このような場面は、多くの生徒たちの中で見られた。しかし、①と②の場面で、聞き手としてどの質問をすればよいか迷っている様子が見られた。生徒たちは、それぞれの反応や質問を使用する場面を理解できていないと考える。よって、意味や発音のみならず、それらを使用する場面の理解が必要であることが分かった。学習者が聞き手として発話をする場面を、日常的に授業内で意図的に仕組み、理解を促していく必要があると考える。また、授業内で、B パターンを行う前に、さらに聞き手としての発話のスキルを向上をねらい、「クイズをしていて困ったことはありませんでしたか?」と生徒たちに会話の中での失敗事例を問いかけた。しかし、生徒たちからは「特にないです。」と返ってきた。ここで教師が、成功事例を尋ねていれば、生徒たちの反応は異なっただのではないかと考える。本実践内で行うことができていないので、今後の授業実践内で行っていききたい。

## 4 成果と課題

○学習者が自覚している発話者である聞き手としての難しさを知ることができた。また、そのような難しさを緩和して聞き手指導を行うことで、日本語から英語への変換方法が分からないことから沈黙する場面が減った。その結果、学習者は聞き手として質問や反応をすることで、話し手からの会話の情報を多く入手することができ、コミュニケーションのラリーを続けられることが分かった。

●授業実践を分析することで分かった聞き手としての難しさに対して指導の方法を検討していく必要がある。発話者としての聞き手のスキルの向上のために (3) 授業実践の結果で述べた内容を中心に、今後取り組んでいきたい。

## 主な引用・参考文献

- 文部科学省 2017 中学校学習指導要領 外国語編 開隆堂  
坂田浩 2006 「聞き手」からの英語スピーキング指導の可能性, 6, 8  
<https://core.ac.uk/download/pdf/197190545.pdf> (2021 年 12 月 21 日 閲覧)